

<b>Title</b>	ICT の活用ができる英語科教師の育成を目指して：英語科教授法の実践から
<b>Author(s)</b>	小川，隆夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :9-12
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5758">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5758</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# ICTの活用ができる英語科教師の育成を目指して —英語科教授法の実践から—

小川 隆夫

## 1. はじめに

「世界最先端IT国家創造宣言」(平成27年6月30日閣議決定)<sup>1)</sup>により、我が国は世界最高水準のIT社会を目指し、教育現場の高速ブロードバンド接続、情報端末配備、電子黒板や無線LAN環境の整備、デジタル教科書・教材の整備を促進している。

聖学院大学でも多くの教室に、長短投影プロジェクターを用いた固定式電子黒板(Interactive White Board以下IWB)が設置された。欧米文化学科の中高英語科教諭を目指すための英語科教授法の授業ではICT(Information and Communication Technology)を活用した模擬授業を取り入れ、教育現場ですぐに役立つICT活用力を身につけるための努力をしている。これからの英語科教師には生徒の発達段階に応じてICT教育を実施することが常に求められるからである。本稿では特にIBWとタブレットを活用した授業に注目し、その積極的な活用への取り組みを報告する。

## 2. 世界にみるIWB

### 2.1 日本におけるIWB普及の実態

総務省は「フューチャースクール推進事業」<sup>2)</sup>、また、文部科学省は「学びのイノベーション事業」<sup>3)</sup>と銘打ち、情報端末の1人1台の整備と普及を推進している。

しかし、2015年3月1日時点での小学校・中学校・高等学校・特別支援学校のコンピュータ1台あたりの児童生徒数は6.4人である。

IWBに注目すると全1,256,273教室中90,503台であり、これは全教室の7.2%、1学校あたりにしてわずか2.6台である<sup>4) 5)</sup>。

### 2.2 世界におけるIWBの普及

IWBが世界で一番普及している英国では2003年から2005年にかけて政府主導で行われたthe Schools Whiteboard Expansion (SWE) projectにより電子

黒板の普及が加速化した。2011年には小中学校の全教室の80%に導入され、2016年には93%になると予測されている(市口2013)。

英国のIWB整備方針は日本でも大変参考になる。第1に、1人1台情報端末が行き渡るまでには莫大な予算がかかる。その上、竹内(2012)が「ICT機器は消耗品だと指摘しているように商品の開発サイクルが早く、新製品の性能向上はめざましい、数年も経たずに旧製品は価値が半減してしまう傾向にあり普及を待っているあまりにも時間がかかる。

第2に、1人1台の情報端末を利用している学習は習熟度に応じた個別学習が可能であるが、パソコンが介在するため教師と生徒の直接のコミュニケーションがとりにくいためコミュニケーション能力の低下を招く恐れがある(市口, 2013)。さらに、パソコンを操作しながら授業をするよりも、生徒の視線を教師と黒板に向けさせながら授業を進めることができるIWBは教師と生徒のコミュニケーションを取るためには効果的であり、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを重視する現在では活用性が高いと考える。

市口(2013)によれば、2番目に導入率が高いのがトルコであり、2016年には81%になり英国に次いでいる。トルコは2011年から3年計画で、国家プロジェクトとして幼稚園から高校までの57万教室すべてで電子黒板とタブレット端末を導入予定である。また、2011年には、世界中の3,400万教室の約8分の1の教室がIWBを備え、2016年には5分の1にまで増えるという。こうして他国と比較した場合、日本のIWB普及の速度は極めて遅く世界からかなり遅れを取っているのが現実である。

## 3. 効果的なICT活用のために

普及が遅いとはいえ、最近では小中学校の授業でIWBやタブレットを利用するのは普通の光景に

なりつつある。しかし、ICT整備が進んだために利用場面を無理やり作り出しているように感じられる学校もある。授業の目的に応じて生徒にどんな力をつけていくために使うかを常に考える必要がある。

授業でICTを効果的に活用するために、竹内(2012) は以下の8つの指針を挙げている。

1. ICTに振りまわされない。
2. 機器は消耗品と考え、どんどん使う
3. 教材は保存・蓄積し、共有・再利用する
4. 常態化を目指す
5. 人と人をつなぐ
6. 繰り返しに利用する
7. 認知のメカニズムに合わせる
8. 学習の個別化を進める

筆者はこれらを念頭に学生の模擬授業でのICT活用を促している。

## 4. IWBとタブレットを活用した授業構築

### 4.1 タブレットの利点を生かした授業

英語科教授法ではIWBと端末機器は基本的にタブレット、特にiPadを活用した中学校英語科の模擬授業構築に取り組んでいる。iPadは2010年5月に日本で発売となったApple Inc.製のタブレットであるが、教育現場へのICT導入を促進する原動力となったものと考えられる。

iPadが教育に向いている理由として、小池、神(2013) は以下のように述べている。

- ①手軽さ…軽く、バッテリーの持続時間が長く電源コードの必要がない。使いたい時にすぐ起動できる。
- ②簡単さ…感覚的に使えるため操作を教えたり覚えたりする手間がかからず、授業や校務など、その本来の目的を達成するための最強の武器となる。

筆者は操作が簡単で生徒と対人コミュニケーションを損なわず、授業の進捗が非常にスムーズになることに大きな価値を感じている。



### 4.2 IWBとタブレットの融合

OHC（Over Head Camera実物投影機）を使い、教科書の本文や写真、図表、資料などを拡大しスクリーンに映し出すことは一般のプロジェクターを利用して行われてきたが、IWBを利用することにより線、記号、文字などを色や太さを変えて自由に書き込むことが可能である。また、それを一瞬にして消すことや保存することもできる。

英語科教授法の授業ではIWBとタブレットのそれぞれの特徴を最大限に生かした活用を以下のように考えた。

- 1) OHCのカメラの下に置けない大きさのものや立体物を好きな角度から撮影し映し出す。
- 2) 授業の目的に合わせて撮影した写真を加工して使用する。
- 3) 動画を撮り、その場で再現する。
- 4) 英作文など生徒のノートをそのまま撮影し数人分を即座に並べて比べながら意見交換をする。
- 5) 動画を静止画として使用する。
- 6) 画像と音を一緒に利用する。
- 7) You Tubeを活用し生のビデオ教材を利用する。
- 8) 検索機能を使い、教師が検索する様子を生徒が画面で共有する。
- 9) 検索したものをすぐに授業に活用する。
- 10) 生徒と向き合いながら拡大、縮小、移動など

を行う。生徒は教師とスクリーンの両方を見られる。

- 11) 問題を与えた後、生徒の顔を見ながら即座に答えを提示する。

## 5. 模擬授業の実践から

### 5.1 静から動へ

“Stevie Wonder- The Power of Music” (学校図書、中学校3年生)の模擬授業では、導入でタブレットにあるStevie Wonderの静止画を提示し、どんな人物であるかを想像させた。生徒たちからArtist, African Americanなどの意見が出された後、ステージで熱唱している動画へと移った。大勢の観客を魅了させる彼の姿からその偉大さが想像できThe Power of Musicの意味を徐々に感じ取らせながら授業の主題へと展開することができた。この静から動への転換はICTの重要な活用法である。



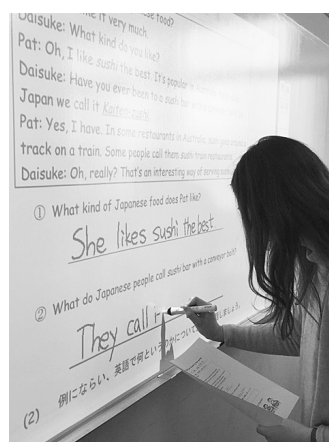
### 5.2 教科書解説での利用

文法解説では、学生はタブレットで教科書のページを提示し、予め保存していた数色の線や記号を一瞬のうちに提示し、さらに生徒の目の前でコメントを書き込んだ。参加した生徒役学生のコメントには要点が色分けされて明確でありノートが取りやすいとあった。人は楽しみのために読む小説などにはほとんど下線や注釈を書き加えないが、論文やワークブックや重要な書類などにはそれらを書き加え、自分の考えをそこに投影する(赤堀、2008)という。この活用方法はまさに教師の説明をより明解にするだけでなく生徒のノートテーキ

ングを効率化し理解を促進させるようである。

また、教師の自作問題をIWBに映し、生徒がそこにペンで答えを書き、教師は他の色で注意点や訂正を書きこんだ後、最後に正答を一段下に提示した。これによって説明を聞き逃した生徒や中途半端に理解した生徒にも正答がわかるのが好評であった。

### 5.3 繰り返しの利用



数年前まで、学生たちは教育実習の直前まで厚紙のフラッシュカードの使い方を練習したが、IWBとタブレットを利用することにより、瞬間にいろいろなパターンの繰り返し練習が可能になった。フラッシュカードは生徒に文字や単語と音声の関連性を理解させ、教科書の音読練習へと進める授業の過程で使われるものであるが、学生たちは、人は単純な繰り返しにすぐに飽きてしまうため変化が重要であることに気づいた。Flashとはちらっと見せ一瞬に音声と呼び出す練習であるが、リストアップした単語を専用アプリで次々とフラッシュさせ、多方向から速度を変化させながら画面に登場させることにより繰り返しであっても生徒たちの集中力を維持することに成功した。

また、単語の提示と一致して発音を聞かせことや生徒が発音した後に再度音声を再生するなど、発音練習をより効果的に行う工夫ができた。



## 5. まとめ

ICTを活用した模擬授業では最近の学生は数年前より手際の良さが違う。模擬授業を担当した3年生は中学生の時にすでにiPadがあった。まさに生活の中に常態化しつつある時代を過ごしている。

教育現場のIWBの普及率はまだまだ低く、こうした取り組みが卒業後の現場ですぐに役立つとは限らないが、英語教授法の中でICTの活用を考える時間を持つことは、これからICTを使った授業が常態化して、誰もことさら存在を意識せずに授業に取り組めるようになるために必要である。

また、これからの模擬授業には可能な限り最新のICT機器を取り入れて、学生自ら活用方法を探りながら授業構築できるように工夫していきたいと考えている。

## 注

- 1) 「世界先端IT効果創造宣言」の変更について（平成27年6月30日閣議決定）  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/pdf/20150630/siryoul.pdf> 2016年2月9日アクセス
- 2) 「フューチャースクール推進事業」総務省  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/joho\\_tsusin/](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/)

[kyouiku\\_joho-ka/future\\_school.html](http://kyouiku_joho-ka/future_school.html) 2016年2月9日アクセス

- 3) 「学びのイノベーション事業」文部科学省  
<http://jouhouka.mext.go.jp/school/innovation/> 2016年2月9日アクセス
- 4) 「平成26年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1361390.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1361390.htm) 2016年2月9日アクセス
- 5) 「黒板のタイプ別・設置場所別台数\_電子黒板整備学校数」文部科学省平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査  
[http://www.data.go.jp/data/dataset/mext\\_20150515\\_0024/resource/fc5174ac-6ea4-4e4b-ac34-62b3073c4d3f](http://www.data.go.jp/data/dataset/mext_20150515_0024/resource/fc5174ac-6ea4-4e4b-ac34-62b3073c4d3f) 2016年2月9日アクセス

## 参考文献

- 赤堀侃司（2007）「電子黒板活用ガイド」電子黒板活用効果研究協議会。  
<http://edusight.uchida.co.jp/e-iwb/images/index/guidebook.pdf#search='電子黒板活用ガイド'> 2016年2月9日アクセス
- 市口恒雄「電子黒板（インタラクティブ・ホワイトボード）導入による教育のICT化に向けて『科学技術動向』2013年10月号（139号）  
<http://data.nistep.go.jp/dspace/bitstream/11035/2437/3/NISTEP-STT139-17.pdf> 2016年2月9日アクセス
- 小池幸司・神谷加代（2013）『iPad教育活用7つの秘訣～先駆者に聞く教育現場での実践とアプリ選びのコツ～』ウイネット出版
- 竹内 理（2012）「ICT利用の8つの指針－英語授業でより良く活用するには」Teaching English Now Vo.23 Fall  
<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/7483/1/KU-1100-20120901-02.pdf> 2016年2月9日アクセス
- （おがわ・たかお 聖学院大学人文学部欧米文化学科特任講師）